

地下鉄駅に着くと発車の時刻が迫っていたので、エスカレーターを歩いて登った。途中に立っていた一人の中年男性に「失礼、先に行かせて下さい」と声をかけ追い抜こうとしたら、ものすごい剣幕で「階段を歩け」と怒鳴って睨みつけてきた。朝の出勤時に地下鉄で空席のスペースを考慮せず占領している人に膝送りをお願いすると、寝不足なのかストレスが溜まって疲れているのか露骨に嫌な顔をされる時がある。地下鉄に全盲者が盲導犬と乗車してきても、ほとんどの乗客は遠巻きに見るか知らないふりをして、席に案内しようとしなくても最近の傾向である。

寛容なき社会

— 不安を抱えて生きる —

情報広報部長

山科 賢児

冒頭の男性はなぜ怒ったのだろう。急いでいたにせよ、あの時もう少し別な対応ができなかったか、エスカレーターでの歩行はルール破りだったかなと思いつくが、おそらく後ろから突然声を掛けられ驚き危険を感じ、とっさの防衛本能から怒りの感情が出たのだろう。だが「追い抜いた」のは問題の本質ではなく引き金である。感情的になる場合は、「こうあるべきである」「こうでなければならぬ」といった思考にがんじがらめに縛られている時が多い。背景には心に余裕がなくなっていたと思うのは考えすぎだろうか。

中学や高校時代は市電を利用して通学して

いた。混んだ電車で鞆を持って立っていると「ここに置いたら？」持ってあげる」と声をかけられ、座っている人の膝に鞆を置かせてもらった記憶がある。日本で今そのような好意を示したらどうなるだろうか。「結構です、余計なお世話かいです」と言われかねないし、そのように声をかける人も皆無である。優先席がなかった時代は、お年寄りや小さい子ども連れの親子が電車に乗ってくると、誰ともなく席を譲るために乗客が一斉に立ち上がる光景を目にしていた。

東南アジアでは今も主な交通手段はバイクであり、その数の多さと同時に歩行者とバイクの絶妙な間合いには驚嘆する。青信号で横断歩道を渡る歩行者の前後のぎりぎりをバイクが相当のスピードで走り抜けるが、歩行者もバイクもいらみ合うことも声を荒げて怒鳴ることもなく、面

白いほど秩序が保たれている。欧米では赤信号でも車が通らず安全と判断すれば横断歩道を渡る人たちがいるかと思えば、じつと信号が青に変わるのを待っている人もいて、それぞれである。

台北市でバスに乗ってつり革につかまっていると、髪の毛の白いのが幸いしたのか、若者が手招きして席を譲ってくれた。台湾では地下鉄や新幹線での携帯電話の通話は禁止されていない。大きな声で話すわけでもないのが特段気にならない。日本では「お客様のご迷惑になるので遠慮ください」とアナウンスされるが本当なのかと疑問に思う。

一方、怒りや不満を外に出さない人々にも遭遇する。彼らは相手の気持ち慮りすぎて、自分の意見を主張しない。その背景には傷つきたくない、自分の考えを示しても所詮変わらないし無駄である、人を信用できないなど不安と自信がない感情が背後にあるように見える。そのような状況が続くと自己肯定感は無くなり徐々に肉体も精神も疲れ、生きるエネルギーが枯渇してしまいコミュニケーションが遮断されてしまう。

現代の日本では他者どう付き合うか、どのような距離感で人間関係を構築し維持するかが大きな関心事になっているが、うまくいかず不安を抱え、その結果他者に不寛容となっている人が多いのも現代の特色である。「わかり合える」「わかり合えなければならぬ」というムラ社会の考えから脱却できていないのが大きな原因であろう。同質性を重んじる今までの作法から「どうしてわからなやいけなやい、ぶつからなやい」とお互いが共存する方向へと脱却する時期が来ている。テレビや週刊誌ではどうでもよいスキキャンダルへのバッシングが、SNSではエキセントリックな書き込みによる炎上が日常茶飯事となっている。個人もメディアも組織も世間の非難の声を恐れ同調圧力に屈している状況である。風を読み空気を読んで逆らわず、とにかく波風を立てず協調第一で目立たないこと、ミスをせずチャレンジせず大きく成功しないこと、人の悪意の標的にならず反感や嫉妬を抱かせないこと。そして前例に従い現状維持を一番とすること。これが現代の日本での安全に生きていく極意となっている。あぁなんと息苦しい世の中なのだろう。